

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

1993年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査は平城宮跡12件、平城京跡9件、京内寺院等7件である。以下に主要な調査の概要を報告する。

1 平城宮跡の調査

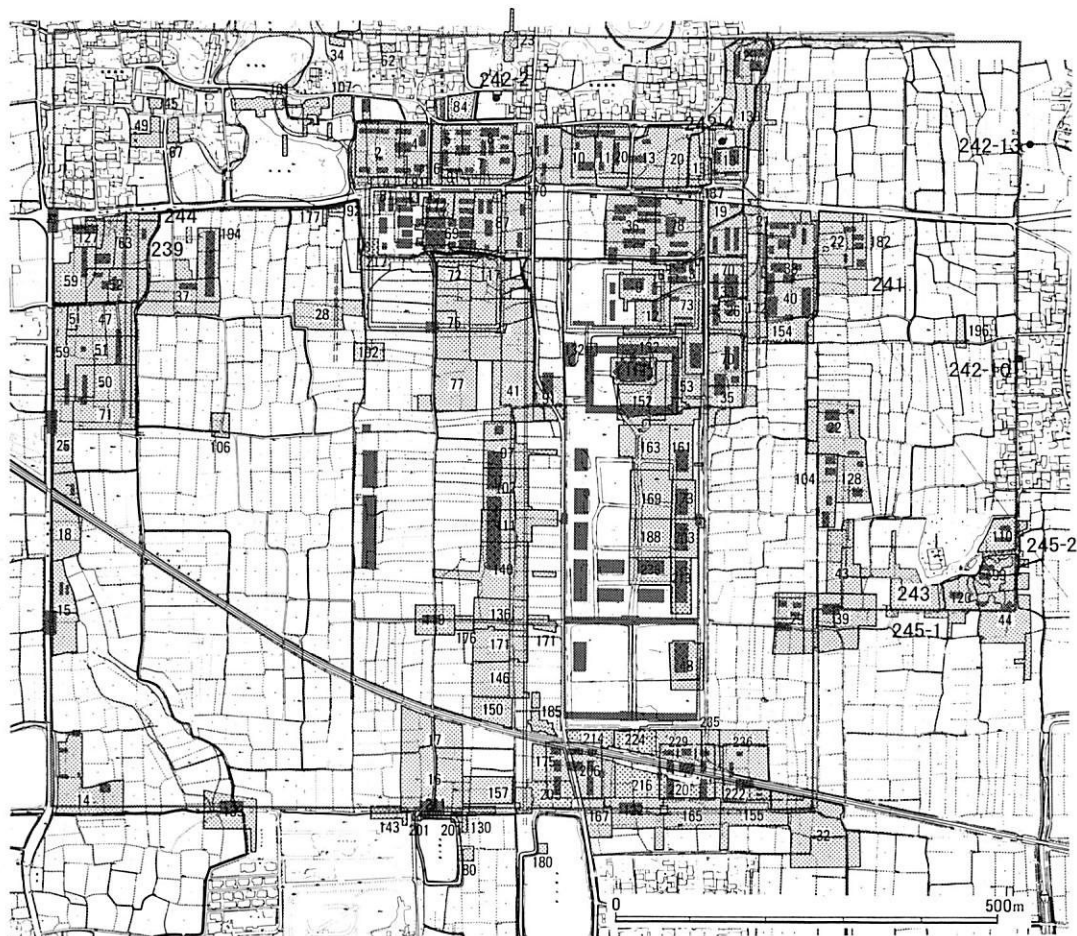
造酒司の調査（第241次）

本調査区の北側ではこれまでに第22・182次調査を実施し、築地塀の区画内の井戸と建物群の存在が判明している。「造酒」「酒」と記された木簡・墨書土器、甕据え付け穴を伴う建物跡が発見され、「造酒司」跡と推定されている。今回の調査でもその一連の遺構を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物11棟、掘立柱塀4条、溝9条、井戸2基で、3時期の変遷がある。

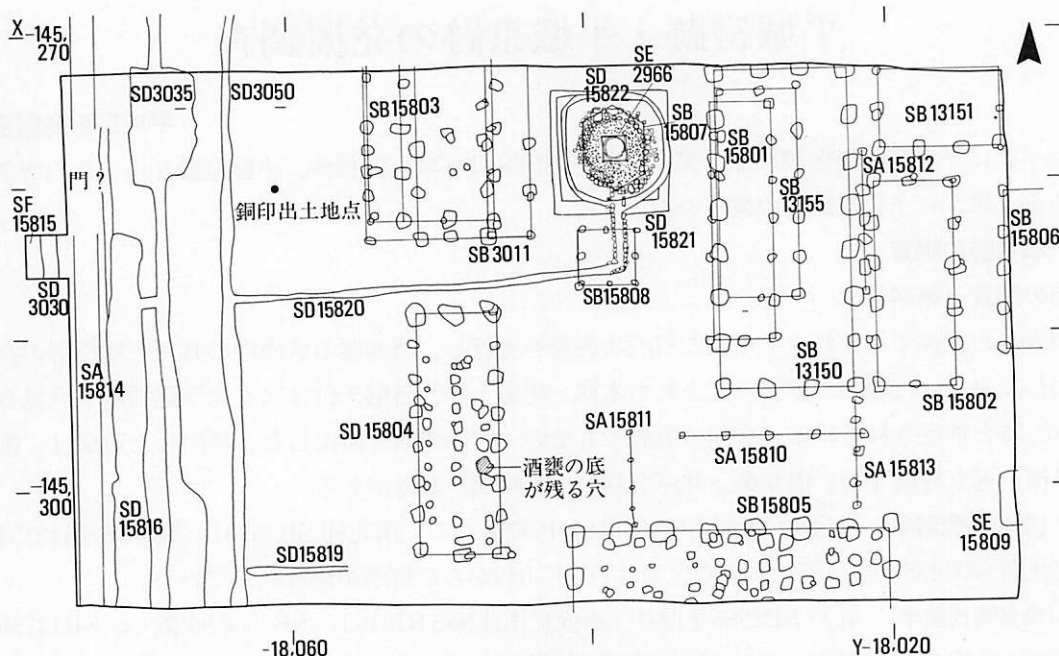
A 1期(奈良時代前半) 西側を築地塀 SA15816に区画される。南北棟 SB15801、東西棟 SB13151が建つ。南北溝 SD3035には、第22次調査区の井戸 SE3049からの排水が流れ込んでいた。

A 2期(奈良時代前半) 井戸 SE2966を掘り、東側に南北棟 SB13155と SB15802を置く。SB13155の南側は東西塀 SA15810で区画する。井戸の西側には甕据え付け穴を持つ南北棟 SB15803を置く。井戸の周囲の方形石組溝 SD15821はL字状溝 SD15820を経て、調査区西側の南北溝 SD3050につながる。この溝には、第22次調査区の井戸 SE3046・SE3049からの排水も流れこむ。

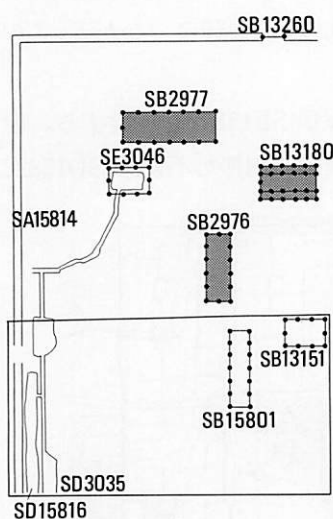
B期(奈良時代後半) 還都後の再整備の段階である。井戸 SE2966に井戸屋形 SE15807を付設する。屋形内には石敷を施す。この石敷には2時期が認められ、下層では井戸の周囲に円形の石組溝 SD15822



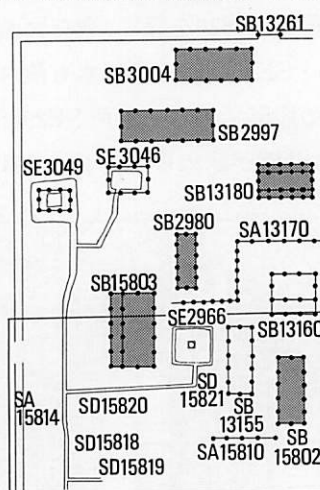
1993年度 平城宮跡内発掘調査位置図 1:10000



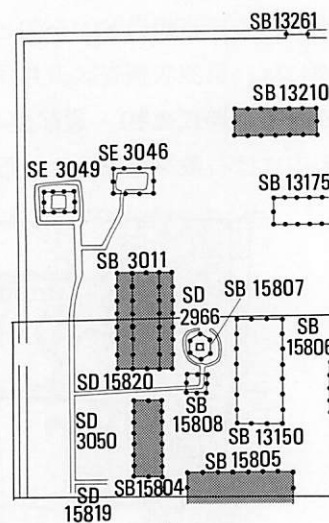
平城宮第241次調査遺構図 1:500



A1



A2



B

平城宮第241次調査遺構変遷図 ■は酒甕を伴う建物

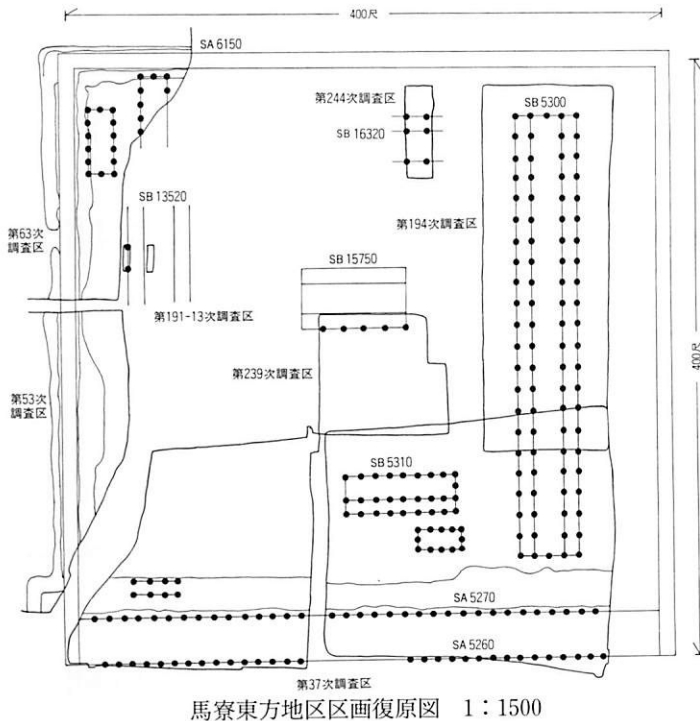
をめぐらし石組に作り替えた南北溝 SD15820 とつなげるが、上層では溝を埋め井戸周囲をバラス敷にする。井戸屋形の周囲には楕円状雨落溝 SD15822 をめぐらし、SD15820 につなげる。SD15820 の L 字状部分に SB15808 を建てる。井戸の東側に桁行 7 間、梁間 3 間、10 尺等間の南北棟 SB13150 が建つ。この建物は無底で内部空間を広くとっている。その南には内部に 4 列の甕据え付け穴が並ぶ東西棟 SB15806、井戸西側にやはり甕据え付け穴を伴う南北棟 SB3011、その南に 3 列の甕据え付け穴が並ぶ南北棟 SB15804 が位置する。また、調査区東端で東西棟 SB15806 の西妻を検出している。

今回の調査でも造酒司の東限と南限は確定できず、東西 60m 以上×南北 90m 以上という破格の規模を持つ官衙であることが判明した。奈良時代前半には第 22 次調査区で検出した井戸 SE3046・SE3049 を中心とする建物配置をとるが、後半には今回検出した井戸 SE2966 を核とする配置に変化する。この井戸 SE2966 の井筒は、径約 140cm。杉の一木をくりぬき、縦に 3 分割した後、据え付けの段階で再び合わせて設置している。井戸底にはバラスを敷く。井筒の周囲に方形板枿を伴う。北側の井戸 SE3046・SE3049 と比べ小規模だが、特殊な施設を伴い、建物群の中心位置を占め、特別な用途が想定される。

また、建物には据付礎を伴うものと伴わないものがあり、前者が醸造・貯蔵施設、後者が管理施設と考えられる。注目すべき遺物に調査区北西部出土の銅印がある(p.82)。酒甕封緘のための封泥用の印の可能性はある。

馬寮東方地区の調査(第239・244次)

第37・52・63・191-13・194次調査により、築地塀と掘立柱塀に囲まれた一郭の存在が判明している。今回の調査区はその内側部分にあたる。第239次調査区で東西棟礎石建物 SB14750、東西溝 SD15768、



南北掘立柱塀 SA15769、第244次調査区で東西棟礎石建物 SB16320、池 SG16335を検出した。建物は両者ともに布掘り状の掘り込み地業を行った後基壇を築いており、第37・194次調査で検出した SB5300と同様の工法をとる。SB14750は側柱筋、入側柱筋、東妻柱筋部分を検出し桁行柱間14尺、庇の間10尺となり、SB5300の規模と一致する。また、SB01の北庇柱筋は SB5300の北妻柱筋にそろい、この一郭の建物の計画的配置がうかがえる。この一郭の西面と北面を区画するのは第52・63次調査で確認された SA6150であり、南面の区画は第37次調査区の掘立柱塀 SD5260と考えられる。その場合、区画の南北長が400尺となり、一辺400尺の正方形の区画であった可能性もある。

注目すべき遺物として、第239次調査区出土の黄釉六角小塔屋蓋片がある。

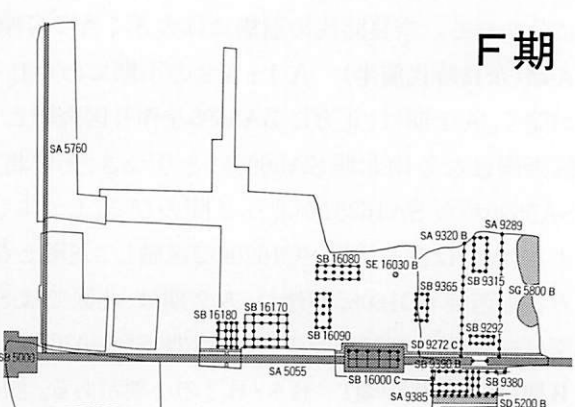
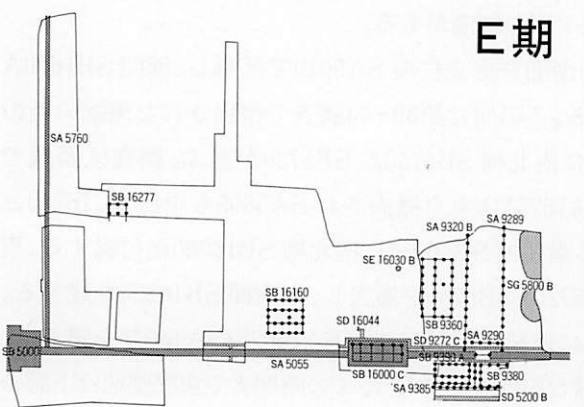
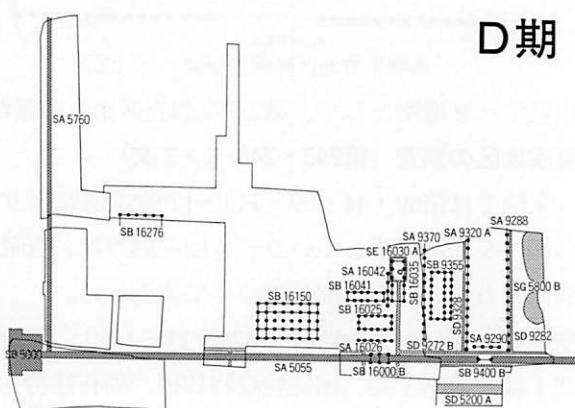
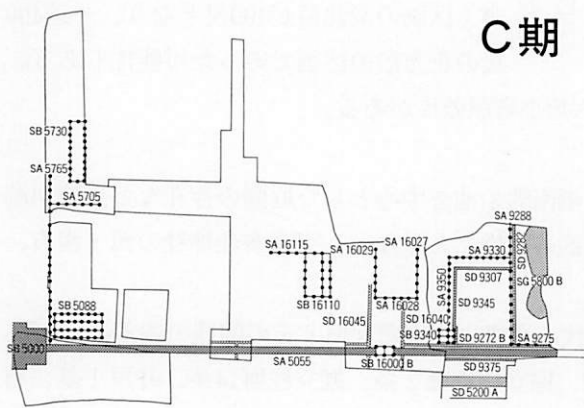
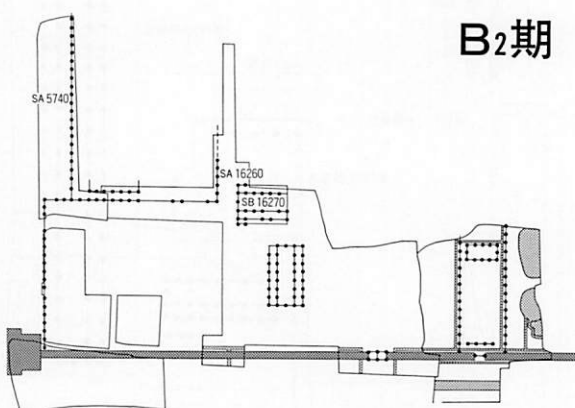
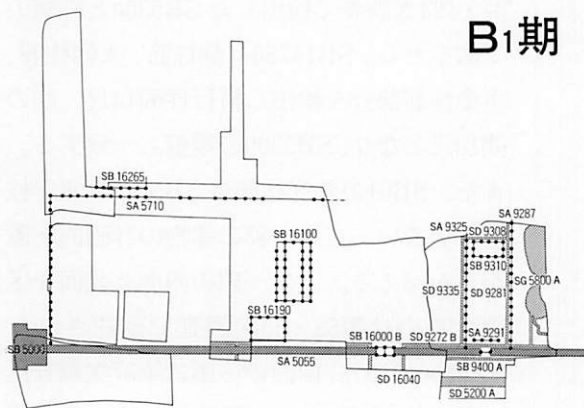
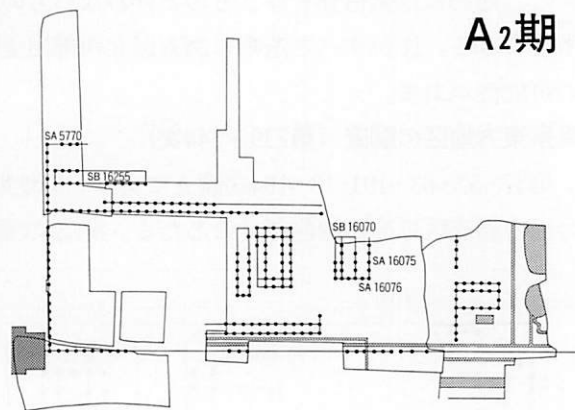
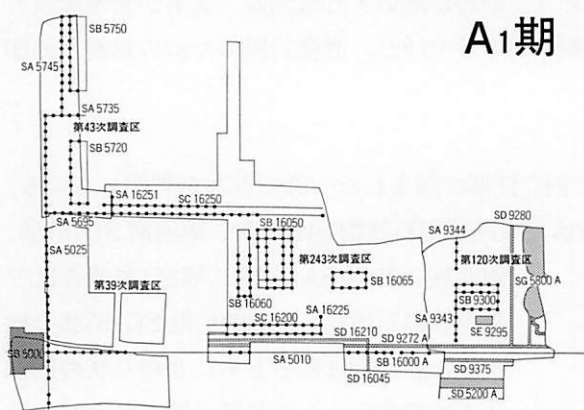
東院地区の調査(第243・245-1・2次)

東院では第39・44・99・110・120次調査により、東南隅の池を中心とした庭園の存在など東院南端の様相が一部判明している。今回の調査は、東院地区の整備にともない、宇奈多理神社の西・南方、園池北方・東面大垣部分について実施した。

宇奈多理神社西・南方地区(第243・245-1次) 奈良時代の遺構には南面大垣とその関連の雨落溝・暗渠、門1棟、道路1条、掘立柱建物17棟、礎石建物8棟、掘立柱単廊2条、掘立柱塀14条、井戸1基、石敷、溝・土坑多数がある。その他に、古墳1基と埴輪窯5基を検出した。調査区は大きく北区と南区に分かれる。奈良時代の遺構には大きくA～G期の7期の変遷がある。

A期(奈良時代前半) A1・A2の小期にわかれる。南面を掘立柱塀 SA5010で区画し、棟門 SB1600Aが開く。A1期は、北方に SA5695を作り区画塀とする。この塀は第39・44調査で検出された東院の西の区画塀になる南北塀 SA5695にとりつき、その北方に南北棟 SB5750と SB5720が並ぶ。調査区西端で SA5695から SA16251が北へ2間のびる。しかし、SA16251はすぐ撤去され SA5695も単廊 SC16250とする。南区は南を単廊 SC16200で区画し、正殿となる南北棟 SB16050に南北棟 SB16060が付属する。東方に東西棟 SB16065が建つ。A2期は、北区では SB5720・SB5750を撤去し、東西棟 SB16255を建てる。南区では SB16065を撤去し、南北棟 SB16070とそれに連結する掘立柱塀 SA16075・SA16076を建てる。

B期(奈良時代中頃) B1・B2の小期がある。大規模な整地をおこなう。この時期まで東院園池は下層の SG5800Aであったと見られる。B1期は南面大垣築地塀 SA5055を築成し、門 SB1600B・SB9400Aを



平城宮第243次調査遺構変遷図

つくる。北区には東西棟 SB16265がある。北の区画の SC16250を掘立柱塀 SA5710に変わる。南区では正殿を SB16050から SB16100に建て替え、南に SB16190を建てる。B 2 期には、SA5710の東端を撤去し、北へ曲がる塀 SA16260を設ける。SB16190を撤去し、SB16100の西北に東西棟 SB16270を建てる。

C 期(奈良時代後半) B 期までの施設を大きく改変する。北の区画塀、建物は撤去される。同時に、東院の西の区画塀も SA5025から SA5065に替える。門 SB9400A は撤去され、園池は SG5800B に改修される。門 SB1600B の北に道路 SF16115が伸び、その途中に SA16027～SA16029により「コ」字形の区画が形成される。その西方に南北棟 SB16110と付属する SA16115がある。

D 期(奈良時代後半) 園池の西で、南面大垣に再び門 SB9400B を開く。東院の西の区画は築地塀 SA5760に替える。門 SB1600B の北に東西棟 SB16041・SB16025、塀 SA16026を建て、SB16150を建てる。その西に東西棟 SB16150を置く。SA16042の東には井戸 SE16030を掘り、石敷・石組溝を付設し、井戸屋形 SB16503を建てる。ヒノキの板材を縦に20枚並べ円形の井戸枠とする。北区には SB16276がある。

E 期(奈良時代後半) 門を礎石建ちの SB16000C に替える。SB16150は SB16160に、SB9355は SB9360に替える。北区に SB16277を建てる。

F 期(奈良時代後半) SB16160を撤去し、SB16170・16180を建て、その東に SB16080・16190を建てる。

G 期(奈良時代末～平安時代初頭) 門 SB16000C と井戸 SE16030はこの時期まで存続する。小規模な建物を何度も建て替える。

今回の調査で東院の庭園西方の様相・変遷が明らかとなった。出土遺物から A・B 期は恭仁遷都前、C 期が平城遷都直後、D 期が東院玉殿、E・F 期が楊梅宮の時期と推定できる。奈良時代前半には単廊と塀で区画された細長い地区であり、SB16050や SB16100が中心的な建物となる。前者は桁行 7 間、梁間 4 間の四面庇付掘立柱建物、後者は桁行 7 間、梁間 4 間の礎石建物で、柱間は両者ともに 10 尺等間となる。両者とも規模は八省クラスの正殿に匹敵し、大規模な役所の存在が想定できる。奈良時代後半には建物配置が一変し、性格の変化が伺える。南面大垣に開く E 期の門 SB16000C は東院の張り出しをほぼ二分する位置にある。桁行 5 間、梁間 2 間の礎石建ちで凝灰岩で基壇化粧をする。同じ場所に先行する門 SB16000A・B が規模の小さい掘立柱建ちで、SB16000C の柱間も他の宮城門より小さいなど問題点はあるが、この門が宮城十二門の一つである可能性もある。東の棟門 SB9400は協門的なものであろう。門の北にはバラス敷きの宮内道路が通り、北方の宇奈多理神社周辺に重要施設が存在した可能性がある。なお、東院地区南面大垣下層に先行する掘立柱塀を検出し、平城宮造営当初の東院の南面は、宮の北面・西面同様に、掘立柱塀で区画されていたことが確認できた。

この他に、古墳時代の埴輪窯跡(窯体 4 基、灰原 1 基)、土坑、古墳を検出した。宇奈多理神社の丘陵南斜面の 1 号窯は一辺約 4 m の隅丸方形の焼成部と、その東西両側に伸びる張り出し部とを持つ焼成坑である。全長 9.4 m。焼成部北半では粘土を貼り付けた窯壁が一部残存していた。周囲には幅 30～50 cm ほどの溝がめぐり、溝の内側の高い面を床面とする。東辺と西辺に焼きしまった床面が残っているが中央部は剝落し下部の置土が露出していた。張り出し部分に焼け面は存在しない。本来、天井施設を持たず焼成部に埴輪と燃料を置き開放の状態で焼き上げたと考えられる。張り出し部には通気の役割があったのかもしれない。床面近くから最終操業時のものと思われる 5 世紀前半の埴輪片が若干出土している。最終操業後は凹地となり、多量の埴輪が投棄されていた。他の窯体は床面が部分的に残るだけであったが窖窯と考えられる。時期は 5 世紀後半である。1 号窯埋土からは多量の埴輪片、土師器、須恵器が出土した。埴輪には、器財埴輪、家形埴輪が含まれ、年代は 5 世紀後半のものが中心である。5 号窯灰原からも多量の埴輪片、須恵器が出土し、器財形、盾形、動物、人物埴輪が含まれていた。年代的には、全体として 1 号窯埋土資料より下る。

園池北方・東面大垣地区（第245-2次） 第99・100次調査には含まれた未調査部分の調査で、東院庭園の北側と東面大垣部分にあたる。検出した主要遺構は建物2棟、溝11条、土坑、東面大垣と東西雨落溝、木樋暗渠、大垣犬走り上の柱穴群である。遺構の時期は大きく大垣築造前、大垣築造時、大垣築造後に分かれる。大垣築造後の時期区分は、第110次調査の成果に準拠し、B～G期に分ける。

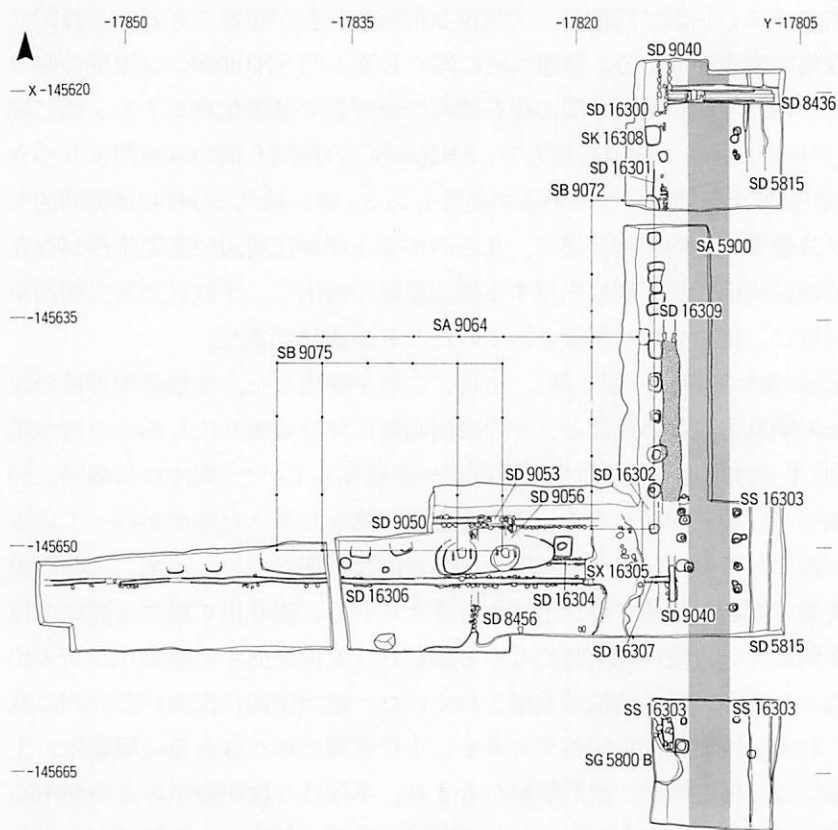
大垣築造以前 大垣の西側に先行する3条の南北溝 SD16300～SD16302が走る。断割トレンチで部分的に確認したのみであり、SD16301と SD16302がつながる可能性もある。なお、東院東面に先行掘立柱塀は存在しない。

大垣築造時 東面大垣 SA5900の築造手順は以下の通り。まず、地山を幅5.7mの溝状に掘りこむ。掘り込みの深さは調査区北端で約1m、南端で50cm程度。掘りあげた地山の灰黒粘土と灰色砂を互層に積み、掘り込み地業とする。築地本体は黄褐色系の土を版築していく。築地の両側の犬走り部分は本体とは別に版築を行う。築地本体の幅は基底部で9尺、犬走り幅は各4尺となる。築地に沿って西雨落溝 SD9040と東雨落溝 SD5815を設ける。SD9040は石組溝で同じ場所で作り替えがある。また、調査区の南では位置を東へよせる。木樋暗渠 SD8436は西雨落溝から大垣を横切り、東二坊坊間路西側溝 SD5870につながる。大垣掘り込み地業の終了後掘形を設け、底板3枚、両側板各1枚を組み合わせた木樋を設置する。そこに凝灰岩の蓋石をのせ、その上から築地・犬走り部分の版築を行う。大垣の東西犬走り上に柱穴列 SS16303がある。施工の際の寄柱、あるいは足場穴と考えられる。

大垣築造後 B期には下層園池導水溝 SD8456に東西溝 SD9050がT字状にとりつく。D期には南北棟 SD9072が建てられたため SD9050の東を縮め SD9053に作り替え、東端を南北溝 SD9056と東西溝 SD16304によって南に移す。E期には、西雨落溝から SD16307、宇奈多理神社方面から SD16306が溜まり状遺構 SX16305につながり、そこから後期園池導水路 SD8455に水が流れる。池の北側には南北棟

SB9075が建つ。F期になると東西塀 SA9064を設け、園池北方を区画する。

今回の調査により、東面大垣と関連施設の築造過程・位置・規模等が判明した。また、奈良時代後半の園池 SG5800Bの導水施設を確認し、一部は東面大垣の西雨落溝から給水されていることが判明した。また、園池と北方の建物群との地盤の高低差については、特に段差などを設けず、徐々に傾斜をつけることによって処理していることが判明した。東面大垣についても、同様の処理を行っているものと思われる。

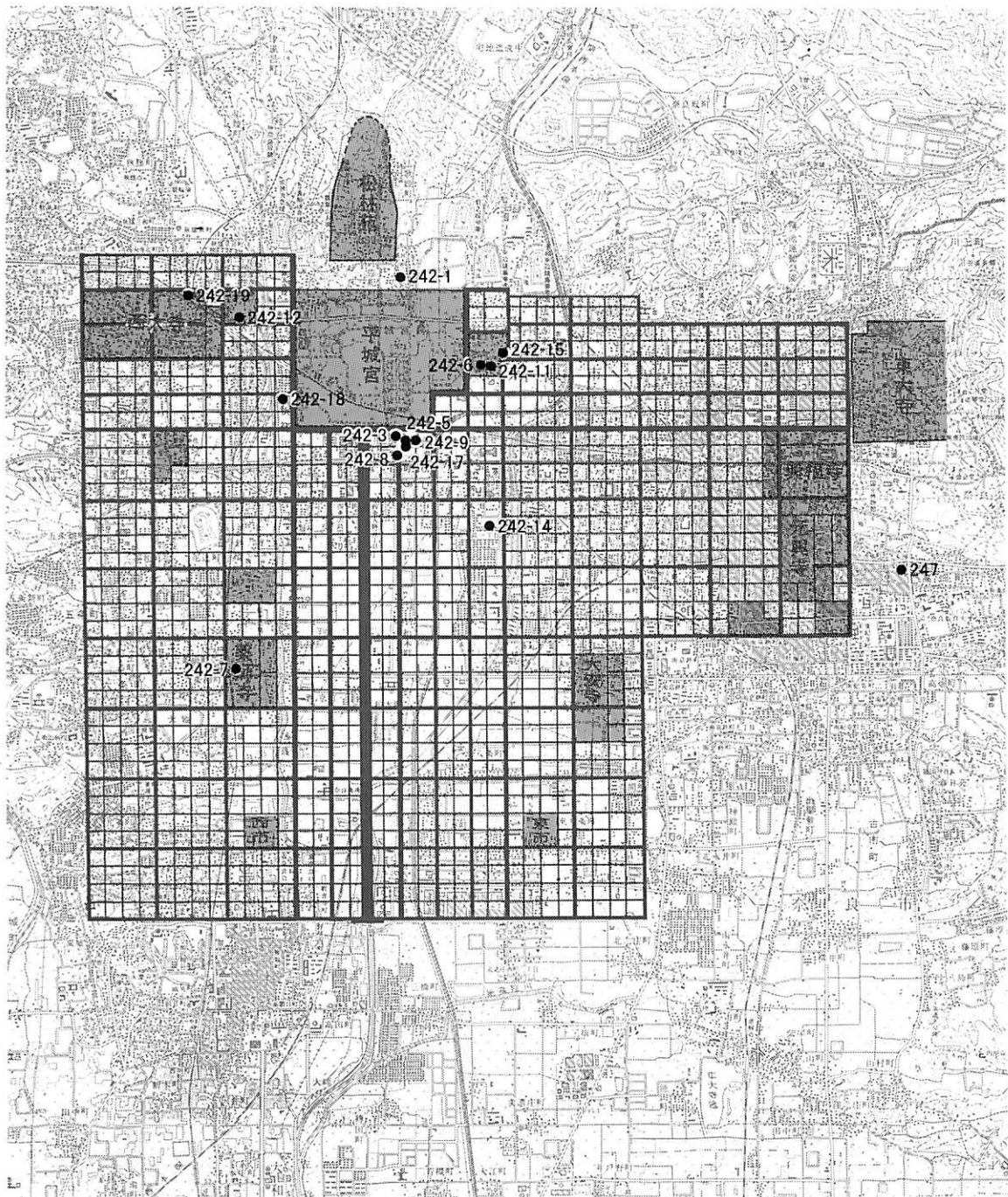


平城宮第245-2次調査遺構図 1:500

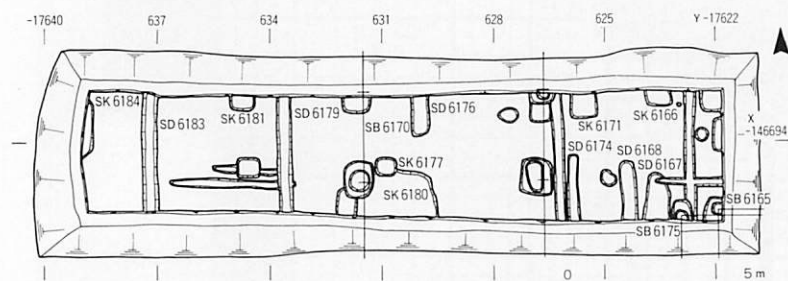
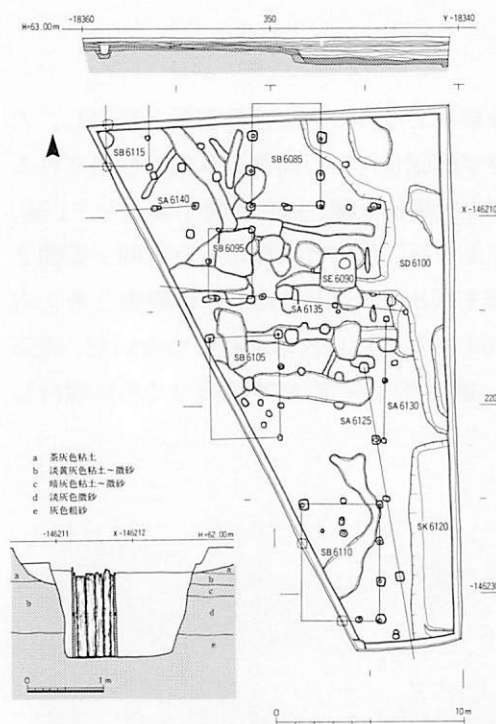
2 平城京跡の調査

左京三条一坊七坪の調査（第242-8次）

駐車場造成の事前調査。道路をはさんで西側の第231次調査結果ではこの地を宮外官衙と想定し、「大学寮」の可能性を指摘している。今回の調査では、第231次調査で確認した中心建物の東端が検出されることも予想され、調査区の設定はそれに合わせて行ったが、掘立柱建物5棟、掘立柱塀4条、井戸1基、素掘溝数条、土坑数10基、河川旧流路1条を検出するにとどまった。建物は4棟が桁行3間、梁間2間以下の小規模の雑舎的なものである。調査区東北隅で一部を検出したSB6115は庇付建物と考えられる。建物の時期は奈良時代後半を主体とする。井戸SE6090の井戸枠は11枚の板材をつないだ、径55cmの円形縦板組である。河川旧流路SD6100は埋土中に多量の遺物を含み、奈良時代後半ころに埋没し



1993年度 平城京・京内寺院等の発掘調査位置図 1:50000



南に位置する第145次調査区では宅地内を東西に区画する南北塀が検出されているが、今回の調査区までは延びていない。したがって、奈良時代初頭この宅地は、今回調査区と第145次調査区の間で南北に区画されていた可能性がある。

3 京内寺院等の調査

頭塔の調査 (第247次)

頭塔の復原整備に伴う調査。これまで、第181・199・232・237次調査を実施している。今回の調査は北面第1段、第2段の石積解体修理に伴い、北面中央石仏西側と北面西端石仏東側の2ヶ所に調査区を設定し、平面検出と断面調査を行った。

これまでの調査で、現在の頭塔の内部に下層石積が存在し、それに伴う基壇上面の舗装にも石敷の時期（Ⅰ期）と小礫敷の時期（Ⅱ期）があることが判明している。今回の北面中央・西調査区でも同様の状況が確認された。石積みの高さは約90cm。上下の石をかみ合わせて積む工法を用いる。Ⅰ期石敷は、30～40cm大の偏平な石を用いた幅1.95m前後の石敷と、その外側の約10cm低い面に巡る、拳大の石を用いた幅約25cmの外周石敷からなる。Ⅱ期小礫敷はⅠ期石敷の上に土をかぶせ5cm程度の小礫を敷いている。東面と同様、この小礫敷は、下層石積の基部まで到達しておらず、当初から小礫敷きが下層石積と連続していなかった可能性がある。北面中央調査区では、下層石積の仏龕の検出が予想

ている。建物 SB6085は流路埋没後に建てられている。

出土瓦塼、土器は奈良時代後半のものが主体で施釉瓦・刻印瓦と墨書土器が見られる。また、土坑 SK6120から土馬21片が出土し遺構の性格が注目される。金属製品としては、井戸 SE6090の井戸枠内最下部から萬年通寶(760年初鑄) 1点が出土した。

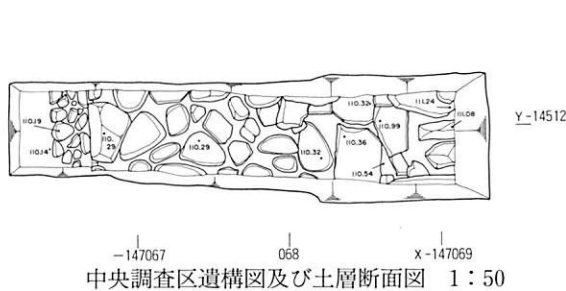
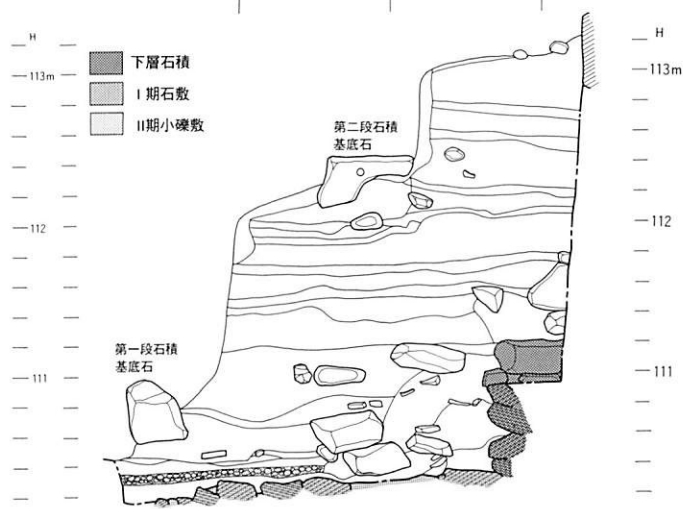
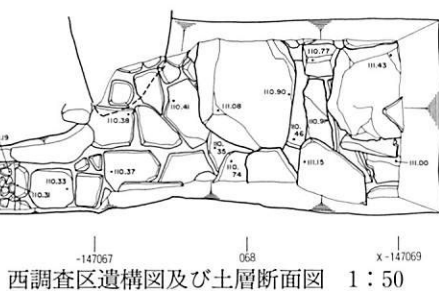
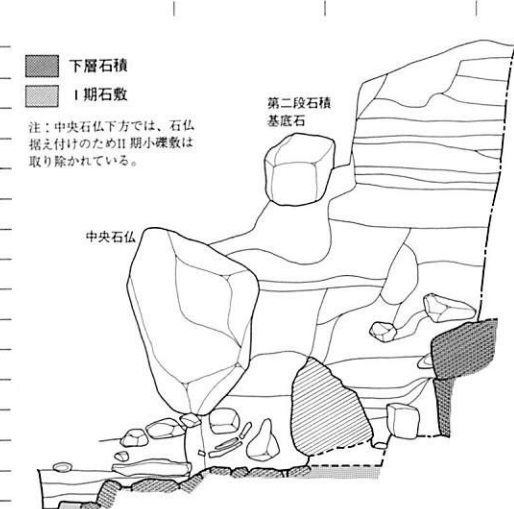
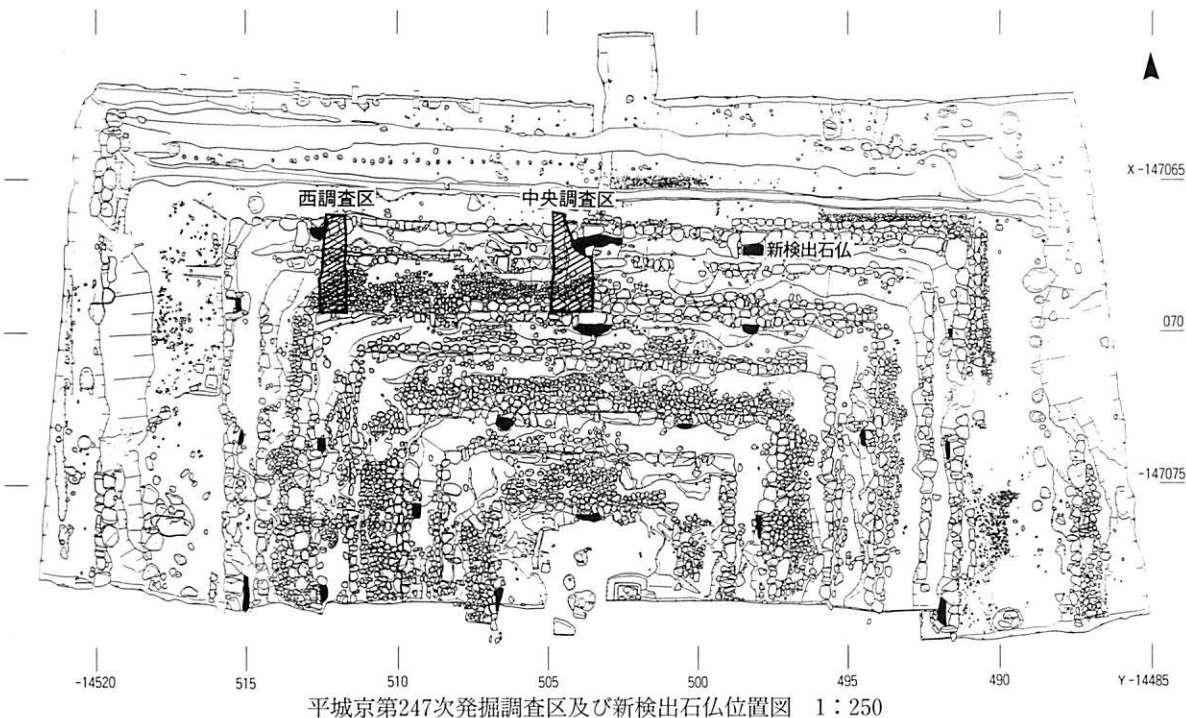
今回調査区は建物密度が低く、大型建物が少ない点で第231次調査区と共通し、両調査区が一体となって機能していたと考えられ、貴族の邸宅とは様相が異なる。墨書土器が比較的多い点などからも、宮外官衙的なものと想定できる。

左京四條二坊十五坪の調査（第242-14次）

共同住宅建設に伴う事前調査。調査地は坪の西北隅に位置し、藤原仲麻呂宅である田村第推定地に含まれる。今回調査区には条坊部分は含まれていない。検出した主な遺構は掘立柱建物3棟、土坑13基、南北溝6条である。調査区中央部南縁で検出したSK6180は径2.2mの円形

土坑で、南半は調査区外に伸びる。埋土中より平城宮Ⅱの土師器・須恵器とともに、型作りで長橢円形の特異な土師器が出土している。SB6170は桁行2間以上、梁間2間の掘立柱建物。桁行は8尺等間。出土土器から奈良時代後半に比定できる。

されたが、石積前面を検出したのが調査区最奥部であったため、有無を確認できなかった。上層の石積は石をかみ合わせたり支い石を用いたりせず、石を置いた後その上面に土を敷きならし、たたきしめた後に次の石を置くという手法を用いている。上層頭塔の積み土は、灰褐色粘質土と赤褐色粘土(小砂礫混)を交互につんだ版築である。ところどころに石や瓦が入る。



遺物はⅡ期小礫敷上面や上層頭塔積み土から東大寺と同範の軒瓦（軒丸瓦6235M・軒平瓦6732F）や土師器・須恵器片などが出土している。

今回の調査でも上層頭塔に先行する下層石積みと石敷・小礫敷を検出した。この結果、下層石積が上層頭塔と同様に正方形の平面を持つことが確実となった。下層石積第1段は一辺21.5～21.6m（72尺）の正方形と推定でき、上層頭塔第1段の一辺約24.5m（82尺）よりも一辺が2.9～3m（10尺）短い。また、下層石積も上層と同様の塔をなし、瓦が葺かれていたと見られる。なお、北面第1段中央石仏から5.1m東であらたに石仏を検出した。

西隆寺旧境内の調査（第242-12次）

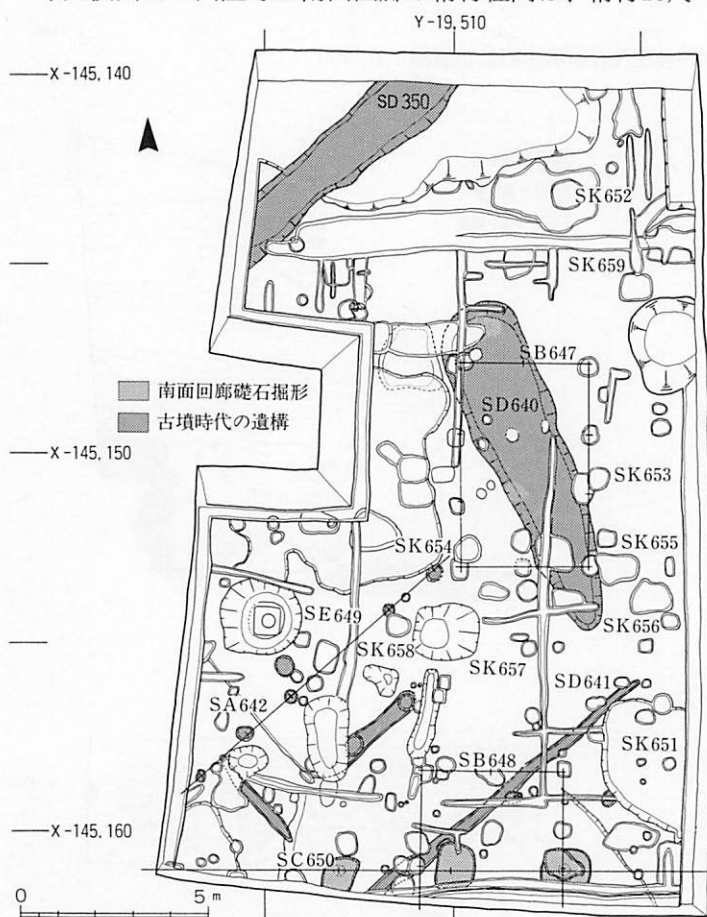
事務所ビル建設に伴う事前調査。西隆寺については、これまでの調査で、金堂、塔、東門、東面・北面回廊、寺域東北地区の様相が明らかにされ、縄文時代、古墳時代など西隆寺造営前の遺構も検出されている。今回の調査区でも古墳時代以後の遺構が検出された。今回の調査では古墳時代の遺構として、柵列・斜行溝数条、西隆寺造営前の奈良時代前半の遺構として、掘立柱建物2棟・井戸1基を検出した。井戸SE649は井戸枠はほとんど抜き取られていたが径2mの円形掘形を持ち、底には径30cm程の曲物を据える。蹄脚硯を含む平城宮Ⅲまでの土器や瓦が出土している。西隆寺の遺構は、造営に伴う整地土上で検出した。調査区南端で南面回廊SC650北側柱列の礎石据え付け掘形の3基2間分を確認した。柱間は10尺等間である。基壇土・掘り込み地業は認められない。残存する掘り込みの深さが5cm前後と遺存状況は悪い。また、SK651は造営に伴うゴミ捨て穴と考えられ、鉄釘、鉄鋸、砥石などが出土した。その他、西隆寺廃絶後の瓦溜りSK652～SK658を検出した。

今回検出した西隆寺の南面回廊の桁行柱間は、桁行10尺・梁間8尺の柱間寸法をとる複廊である東

面・北面回廊と一致することから、南面回廊も同様の規模・構造をとることがほぼ確実となった。

西大寺旧境内の調査 （第242-19次）

共同住宅建設に伴う事前調査。調査区は西大寺創建時の伽藍中心部の北東に位置する。基壇建物1棟、近世の野井戸2基、中世の柱穴数基などを検出した。基壇建物SB800の基壇は、地山の低い調査区南半部では掘り込み地業を行った後に土を積み上げて築成しているが、地山の高い北半部では地山を削り出すことによって形成する。基壇上に礎石据え付け掘形・抜き穴・根石を、基壇東端で基壇化粧抜き穴痕跡を検出し、東西棟建物の東妻4間分、桁行2間分を確認した。ただし、東妻中央部分は遺構の残りが悪く、柱位置を

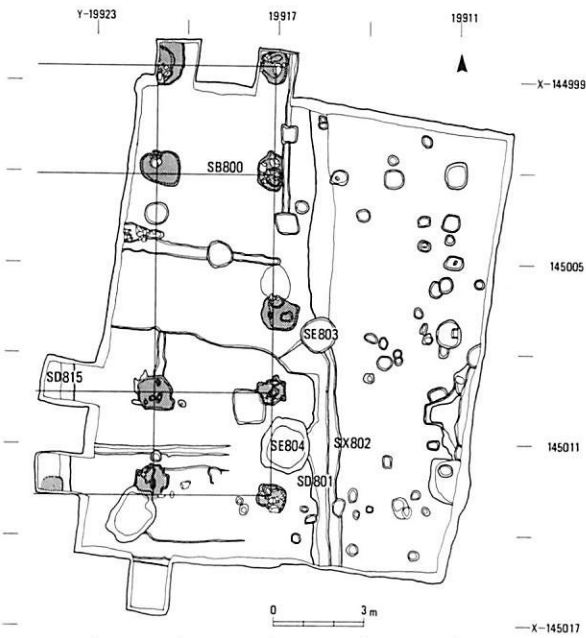


平城京第242-12次調査遺構図 1:200

明確にしがたい。規模は東妻が12尺等間相当、桁行き柱間が13尺、基壇の出は東に6尺となる。掘り込み地業中より奈良時代の土器・瓦が、礎石抜き穴から中世の羽釜が出土していることから、この建物は奈良時代に創建され、中世には廃絶したと見られる。

今回の調査区は西大寺旧境内の北端に位置する。これまでの復原案によると、この位置には食堂院の西側を限る築地塀が想定されており、今回検出した遺構と合致するような建物は存在していない。また、伽藍内の基壇建物のなかで、門や回廊にあたるとは考えにくい状況である。あるいは、ひとつの可能性として僧房を想定することもできるであろう。

(臼杵 勲)



平城京第242-19次調査遺構図 1:250

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積	備考	調査要因
6ACP-M	平城宮 第239次	93.4.1～93.4.28	560㎡	馬寮東方地区	計画調査
6ADD-P 6ALP-K	平城宮 第241次	93.4.4～93.6.30	2,200㎡	造酒司	計画調査
6ABN-F	平城宮 第242-2次	93.4.12～93.4.15	21㎡	平城宮内	個人住宅建設
6AAB-B	平城宮 第242-4次	93.5.10～93.5.20	82㎡	内膳司	個人住宅建設
6ALD-G	平城宮 第242-10次	93.10.19～93.10.20	20㎡	平城宮東辺 (東二坊坊間路)	個人住宅建設
6ALB-L 6AFC-G	平城宮 第242-13次	93.12.9～93.12.10	75㎡	平城宮東辺 (東二坊坊間路)	河川改修
6ALF-A・B 6ALS-C・D	平城宮 第243次	93.6.14～93.12.15	3,500㎡	東院	計画調査
6ACP-N	平城宮 第244次	93.12.1～93.12.21	110㎡	馬寮東方地区	計画調査
6ALF-A・B 6ALS-C	平城宮 第245-1次	93.10.1～94.3.3	1,000㎡	東院	計画調査
6ALF-B	平城宮 第245-2次	94.1.10～94.3.17	620㎡	東院庭園・東面大垣	計画調査
6ASB-C	平城京 第242-1次	93.4.5～93.4.7	27㎡	平城宮北方	個人住宅建設
6AFJ-R	平城京 第242-3次	93.4.20～93.4.23	24㎡	左京三条一坊八坪	個人住宅建設
6AFJ-H	平城京 第242-5次	93.7.5～93.7.12	99㎡	左京三条一坊九坪	共同住宅建設
6BFK-I	平城京 第242-6次	93.7.12～93.7.22	72㎡	法華寺旧境内	個人住宅建設
6BYS-O	平城京 第242-7次	93.7.26～93.7.30	80㎡	薬師寺旧境内	仏像修復作業所建設
6AFJ-O	平城京 第242-8次	93.9.6～93.10.20	350㎡	左京三条一坊七坪	駐車場造成
6AFJ-H	平城京 第242-9次	93.10.1～93.10.6	18㎡	左京三条一坊九・十六坪 (坪境小路)	個人住宅建設
6BFK-I	平城京 第242-11次	93.11.15～93.11.22	36㎡	法華寺旧境内	個人住宅建設
6BSR-O	平城京 第242-12次	93.11.24～93.12.27	300㎡	西隆寺旧境内	事務所建設
6AFM-G	平城京 第242-14次	93.12.16～94.1.10	120㎡	左京四条二坊十五坪 (田村第)	共同住宅建設
6AFB-J	平城京 第242-15次	94.1.20～94.2.4	44㎡	法華寺旧境内	個人住宅建設
6AFJ-G	平城京 第242-17次	94.2.3～94.2.4	10㎡	左京三条一坊九坪	個人住宅建設
6AGC-F	平城京 第242-18次	94.2.8～94.3.1	280㎡	右京二条二坊三坪	職員宿舍建設
6BSD-H・I・S・R	平城京 第242-19次	94.3.8～94.3.30	187㎡	西大寺旧境内	共同住宅建設
6BZT-A	平城京 第247次	93.12.9～94.3.15	6㎡	頭塔	復原工事

1993年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧